〔書評〕

原田正純『水俣が映す世界』

日本評論社・一九八九年六月刊

——福祉領域へのメッセージとして——

小倉襄二

I

私たちは〈社会福祉改革論〉への刻応のなかで福祉領域の論証について思考の枠ぐみの混乱に直面することが多い。いま、理論と実践のレヴェルでの過渡期、あるいは分岐点、〝変革の刻〟に遭遇しているからである。それは福祉の論証にとって避けがたい状況でもある。私はこの状況にはゆっくりと対応したらいいと考えている。福祉の論証は学際的にともいわれているので関連分野の成果への期待もあり、余計に速断しない方がいいのではないか。この想いをさらに強くしたのは本書に接してからである。標題にある〝水俣が映す世界〟は私には強烈で新しい思考の枠ぐみを福祉の領域へのメッセージとして発信しているものとして読んだ。学際性という点もあるがそれ以上に直接にこの〝変動の刻〟に思考の枠ぐみについて混乱している福祉領域への鮮烈なメッセージとして読みとることができた。

原田正純氏（はらだ　まさずみ）は一九三四年、鹿児島生れ、熊本大学医学部卒、神経精神科、熊大体質医学研究所助教授、現在、熊大医学部遺伝研究施設疫学部勤務である。三〇年余にわたる水俣病の研究者として著名である。『水俣病』『水俣病は終っていない』（岩波新書）『水俣病にまなぶ旅』（日本評論社）『水俣の赤い海』（フレーベル社）などの名著がある。その他に公害問題、環境や開発についての論稿も精神神経医学の専門研究と並行して学際的な論稿によって数多くの提言をも行ってきた。

本書は「水俣はまさに鏡である。そこに映してみることは世界を映すことになる。いまほど水俣を語ることが必要なときはない」という著者のコトバに本書が出版された意味が凝縮して語られている。原田正純氏は一九六〇年（昭三五）から水俣病にかかわってきた。一九五六年（昭和三一）五月、チッソ付属病院細川院

『水俣が映す世界』

長により原因不明の中枢神経疾患が多発していると保健所に報告、ここに水俣病が発見された。不知火海域と水俣地域にはすでにネコの〝狂死〟という不吉な兆があり、患者は差別と貧困と非業の病苦に呻吟する風土が出現していた。著者のコトバとしてここを「見てしまうと、そこになにか責任みたいな関係ができてしまう、見てしまった責任を果すように、天の声は私に要請する」と記している。三〇余年、決して風化を許さずいまこそ水俣病を語れという著者のこの〝見てしまった者の責任〟というコトバは痛烈で重い。これこそ、福祉の領域、その現場にかかわるものへのメッセージである。〝変革の刻〟に私たちは見てしまったものの責任として語れるような場面を保持しているだろうか。著者の言う〝見たものの責任〟とはなにか、私たちはこの著者のように見てきたのであろうか。

「水俣病は鏡である。この鏡は、みる人によって深くも、浅くも、平板にも立体的にもみえる。そこに、社会のしくみや政治のありよう、そしてみずからの生きざままで、あらゆるものが残酷にまで映しだされてしまう」という〝見る、見方〟でもある。原田氏は、「水俣病をつうじてみた世界は、人間の社会のなかに巣くっている抜きさしならぬ亀裂、差別の構造であった」とも指摘する。本書は、さらにつぎのコトバをもって私たちへのメッセージとする。「そして私自身、その人を人と思わない状況の存在に慣れ、その差別の構造のなかで、みずからがどこに身を置いているのかもみえた」と。〝人を人と思わない状況〟という表現は本書の記述の随処に使用されている。福祉領域にもこの〝人を人とも思わぬ状況〟は在る。私たちは、それを著者のようによく視、どこに身を置いているかをよく知らないのである。〈社会福祉改革論〉などといってもここがよく見えなければ不毛であり、空々しい詭弁に堕ちるのみであろう。たしかに、水俣病は極点である。人が人として扱われない人間の病像の極限状況である。福祉状況への比較としては、それは状況差に過ぎない。高齢化にともなう老い、障害の自立を妨げる多様な隘路、医療、保健、福祉のサービスのなかで視えるものも著者の言う〝人を人とも思わぬ状況〟をさまざまに映している。私たちは、そこをよく見ていない。目を反らしたり見過しているのではないか。

アメリカの社会科学者が水俣病事件には現代の一つの法則性があり、これを水俣症候群と呼ぼうと提案したこと、水俣病をめぐる企業や行政の対応、さらに研究者からマスコミ、市民にいたるまで一定の法則性（パターン）があることを指摘したことを紹介している。だから水俣病の映す世界は一つの構造であり構成を維持してきた症候群（シンドローム）であった。バラバラに見てはいけない。著者は「水俣病を学ぶと、水俣を映して己の学問なり、政治なり、社会なり、生きざまがみえてくる。水俣病はたんなる一地方の風土病的地方病にとどまらず、そこに普遍的な諸法則が含まれている」とかさねて指摘している。

II

本書は原田正純氏の三〇余年にわたる水俣へのかかわりの総集篇という趣がある。構成は三部に分かれていて、論点は十六の章に配分されている。第一部が直接的な本書の主題としての水俣病についての論稿である。第一部の重要な点は後述の第二部、第三部の検証の〝原点〟ともいうべき論述になっていることである。この部分の徹底した論証がさきの〝水俣病症候群〟→水俣が映す世界という論拠として重み、説得力のある文脈で〝世界〟に映しだされたものを扱う大前提ともなっている。水俣病事件における差別として、その直接、間接の原因の追究が展開している。それは日本社会問題史―社会史としての枠ぐみがあり、チッソの前身、新日本窒素肥料株式会社が水俣に進出した一九〇八年（明四一）いらいの水俣という地域とこの企業の関連を簡潔な分析のなかで提出している。たとえば、一九二五年（大正十四）には、町長には日窒社員がなり、町議会も工場長など関係者七名が当選などこの企業は深く地域行政にくいこんでいったこと、拡張につぐ拡張・増産・敷地買収、そして地域感情は、チッソは〝水俣の殿様〟＝企業城下町の様相となった。

水俣病に侵された人々の差別と苦難は、会社に盾つくものは市民に盾つくものであり、会社に不利益をもたらすものは水俣の市民社会に対する反社会的行為であるという風潮の定着となった。市民間のはげしい亀裂と葛藤、〝水俣病隠し〟というかたちで市民感情に便乗した動きともなった。本書のなかでチッソの経営体質の分析も重要である。水俣病を結果したチッソ（日窒）の経営体質にも鋭いメスが入っている。昭和初期からの大陸の植民地経営（朝鮮窒素肥料、興南工場）の建設、化学コンビナート、朝鮮人労働者へのはげしい差別と抑圧の状況がある。水俣の工場では、中小多数の事故は多発し、この高圧工業、未開拓で危険な経営はパイロットプランの強行により、下手をすれば従業員は勿論、町の人々まで、まかり間違えば町も一瞬にして吹飛んでしまう恐怖のなかでチッソは水俣に君臨した。本書によればすでに環境汚染による漁業被害は一九二五年（大正一四）に問題化して、漁業組合から補償要求があり、水俣病の執拗な歴史―社会史が指摘されている。見舞金を雀の涙ほど支払い戦後においても、水俣病が工場排水に起因した場合においても、新たな補償の要求は一切行なわないという条件をつけることにもこの企業の歴史的な企業体質、人を人と思わぬ傲慢な態度のみえることがわかる。そして、水俣病が社会問題になるたびに、この企業は、その縮少、撤退をほのめかしたという、歴史のなかで〝チッソあっての水俣〟という〝神話〟に依拠するものは、この企業の撤退、縮少をほのめかす理由をつくるものはすべて〝民衆の敵〟（イプセン）という地域感情の構造への精細な分析がなされてもいる。

水俣病のテーマについて多くのことが語られてきたが、福祉領域へのメッセージとしてとくに大切なのは、その〝暗い重圧感〟についての本書の指摘であろう。医師として、水俣病の悲惨や貧

しさをはるかにこえて、身体の病いというより、心の、社会の病いとしての水俣病であったと語り、私たちをいっそうやりきれなくしたのは、権力の側の差別にくわえて、民衆の側、労働者・市民・ときには同じ漁民からもくわえられる差別であったという。地域で水俣病について語る人びとが「あれどんな（彼ちは）という一種独特の響きは、明らかに〝自分たちとちがったものたち〟を指していた。水俣病は〝おかしか（妙な悪い）魚を海から拾って喰った漁民の病気〟という意図した矮小化がはかられ、さらに患者はよかなあ、寝とって倉が建つ、もともと〝片輪〟じゃったが水俣病に便乗して金ばもろうた」という排除、差別に至る。水俣病発見の一九五六年から一五年間、正式患者数一二一人、そして水俣の漁村に限局する。不知火海岸の二〇万人、そしてネコの狂死に象徴される濃厚汚染地区の住民は一〇万人、仮りに一〇人に一人が有機水銀による健康障害があっても一万人、しかも一〇年余、彼ら自身の沈黙が行政のサボタージュを許すことにもなった。この患者の沈黙を外在、内在するものいづれにしろ解明すべきことを著者はつよく主張している。

岡本達明氏の『近代民衆の記録7・漁民』の引用のなかで、水俣病が伝染病でないとあきらかになった後も、たとえば、生活保護を受ける以外に生きる手段をもたぬものについてどうであったか、「村の感情ちいうのは、生活保護受けとる人間な、自分たちの仲間に入れんとですもんな。もう考えになかっですたい。人間性を全然考えん」（池上義春談話）有機水銀を摂取した不知火海岸の住民は一〇万人、漁民からひろく内陸の民に移る。零落者（なぐれ）他所者（よそもん）流れなどと漁民に唾した民衆自身のうえに水俣病は拡大しても、此岸と彼岸の壁の在ることを知る。現代の水俣の語り部としての石牟礼道子氏は「……愚民政策というものが仮りにあるとすれば、愚民もまたおのずから存在するのであろう。繁栄する文明は、かならず自滅の種をその中に宿してきた。愚民とは、残虐化する権力とともにある残虐な民衆である。水俣病事件における行政当局と、水俣市民や熊本県民の反応は、まさしく歴史のリアリズム以外ではない。そのような残虐性も内包するゆえにこそ、そっくりそのまゝ〈愚民〉は、明日、立場を変えて〈受難者〉の運命を荷うのでもあらう」（『流民の都』大和書房・一九七三年刊）とつらくきびしい指摘をしている。この状況は、関千枝子氏の『この国は恐ろしい国』―もう一つの老後―（農文協・一九八八年刊）の指し示すこの〝ゆたかな社会〟状況の現実にも通底する。貧困者障害児・者の、高齢者の、あるいは母子の現況にも水俣病症候群の〝基準〟はあてはまることになる。状況差はあっても、ここにも水俣が映す、人を人と思わぬ世界の諸相が映しだされているといえよう。それを私たちがしかと〝見て〟いないだけである。

第一部において水俣病刑事事件―胎児の人としての復権、裁判における水俣病病像論―医学にとって認定とはなにか、ひとのいのちの値段―この病苦に軽重があるか、の三つの章がある。この章を読んでいて私は朝日訴訟の経過にかさねあわせることが多か

った。水俣病の患者の権利保障ということが争訟につらなる。朝日訴訟が「人間裁判」と一〇年の訴訟経過で呼ばれたように水俣病にとっては、一れんの複雑な裁判はこの事態の解明にとって必須の検証領域であろう。この分析においても原田正純氏は、サリドマイド事件との比較、裁判と認定という避けて通れぬ主題としての症像論、そして生々しい補償問題をめぐるひとのいのちの値段—さきの石牟礼道子氏の『天の魚』の文章の引用などによって、その意味するものをえぐりだそうとしている。

この訴訟関連の分析も、福祉・権利・自己貫徹の権利性—この領域と争訟過程へのメッセージとして多くの啓発的な提言を含むものといえよう。とくにいくつかの症例をあげて、—この痛苦と補償（金）の意味を凝縮して扱っている点に注目したい。著者は、補償のあり方も、福祉のあり方、公害の構造や被害の問題もすべて科学研究の対象になりうるのである。これを医学だけにまかせようとするところにまちがいがある。もっと各分野の研究者、行政官、さらに患者たちの議論をさかんにして本年の救済のあり方を模索することが必要である、との要請もある。

後述のところで、神経疫学者として著者は環境破壊、公害、海の汚染を沖縄で扱うことと並行して精神医療を主題として、環境社会学という視点を提示している。この部分は正に直接的な福祉領域へのメッセージとしてとくに注目すべき提言となっている。

Ⅲ

第二部は棄民の構造—人間疎外の状況という主題で、九州の公害・労災の背景をたんねんに解明しようとしている。水俣・三池・土呂久、カネミ油症の事件の連鎖のような事態をとりあげている。いずれも〝人を人とも思わぬ—人間の破壊〟であった。著者は、とくに、なぜ九州なのかと問うことによって、被害の状況差をこえて、環境汚染による公害症候群の典型としての水俣病、大規模労働災害の典型、三池一酸化炭素中毒、僻遠の地に棄てられた慢性砒素中毒＝毒症の土呂久、化学物質、PCB中毒のカネミ油症のメカニズムを指摘する。これらのケースは、かならずどこかで予防できたものであり、ついで、少くともある時期、被害の拡大を最少限にくいとめることができる機会があった。それにかんする国・企業の責任の重大性を風化をゆるさずあらためて追求し、人を人と思わない状況、差別の存在を告発している。

さらに第三部では、世界の各地域に〝水俣が映す世界〟の諸相についての記述がある。カナダ・インディアンの水銀汚染、カリブ海とマンタロウ川、南米の事例、さらに、ジャカルタの放射性廃棄物、枯葉剤のケース、インドの史上最大の猛毒ガス流出（イソシアアン酸メチル）で二五〇〇人とも五〇〇〇人ともいわれる死者、障害者をだしたボパールの事件、韓国のイタイイタイ病としての温山工業団地の環境汚染など実に多様な実例が現地踏査の臨場感のある描写で記述されている。それぞれの論稿は事態の地

域差、状況差を映してバラバラにみえながら著者よる水俣が映す—人を人とも思わぬ現実の解明と告発の視座によって訣後の集約度は高いものがある。さきの石牟礼道子氏は「水俣病を書くということは、自分が生きてゆく上での自己点検をしていくという非常に私的なことであるにもかかわらず、水俣病みたいなことをテーマにして書いてしまうと、否も応もなく社会的な存在みたいなものになってしまう。それを避けることは現代ではできない。そういう社会の仕組みになっている、と思うのです」(『流民の都』大和書房・一九七三年)と語っているが、このコトバは、著者がこの世界の各地域で公害、人間破壊の状況をとりあげていく発想とかさねあわすことができる。

私が本書をとくに福祉領域へのメッセージとしてうけとめたのは、著者の表現、論証、方法はいま福祉領域の研究にとってもっとも欠落しているものと考えられるからである。著者の枠ぐみは必ずしも総体の理論構築ではない。むしろ、一つ一つの現実を歴史—現実の相関のなかで徹底して究明しようとする試みである。人を人と思わぬ事態を許容できぬとする志がよく視える。その志によって、きびしく個別を問いつめながら総体としての論証がなっとくする位置をしめている。福祉領域の論証の多くはこうした手順をふんでいない。専門化、専門人とはなにを視るべきかについても実に空疎で些末〜矮小化で自己閉鎖している。さいきん福祉領域では、〝改革論〟と称してその理論、実践の視野が曇ってあちこちで横行している人を人と思わぬ状況をみすごし政策不在の正当化やコトバの空転のなかで事態を放置しているのではないか。

筆者の表現によれば「私にとって、水俣病をつうじてみた世界は、人間の社会のなかに巣くっている抜きさしならぬ亀裂、差別の構造であった。そして私自身、その人を人と思わない状況の存在に慣れ、その差別の構造のなかで、みずからがどこに身を置いているのかもみえた」ともいう。福祉領域にかかわるものへの痛切なメッセージがここにもある。

「人間、といってもいろいろございますが、人間というものは本来的にはやっぱり優しいものを、非常に優しいものを持っているはずなんです。会社側や行政当局や、権威や富を蓄えたりして偉くなっていくような階級の人たちが逆に、そういう人間が本来もっている優しさを剝落させてゆくのに比べて、そういう未曽有の受難史をくぐり抜けた側の人間たちが深いまなざしを持って、人間の復権すべき道すじを身をもって指し示している。そのような兆みたいなものが、かすかな、ほの明りのように見えてくるような、そういう気持がしています」(石牟礼道子)。人を人と思わぬ扱いとは、こうした人間の優しさや可能性のなかの優しさを奪うものとして筆者はこのしくみを決して許すことはできないと考えつづけて本書が仕上げられたと思う。

本書は第十六回大佛次郎賞を受賞している。

(1990.1.30)